

論文

東京大学における専攻選択支援に関する研究 —「進学相談室」の役割・支援実態に着目して—

吉岡香奈

1. はじめに

「アカデミック・アドバイジング」とは、学生が自身の専攻やキャリアを決定し、進路に沿ったコース・履修選択を行うための米国の大学で発展した支援活動である¹。米国においては「レイトスペシャリゼーション」と呼ばれる大学入学後に専攻を決定する方式を採る大学が多く、専攻分野の選択に関する支援を含むアカデミック・アドバイジングが実施されている²。一方、日本で「レイトスペシャリゼーション」を採用する大学は一部であり、受験時に学科や専攻等を予め選択することを要求する大学が多い³。それゆえ、大学入学後の学生の専攻選択⁴プロセスに関する研究やアカデミック・アドバイジングに含まれる専攻選択支援は、日本の高等教育研究の中で注目されてこなかった領域である。

日本では一部の大学を除き、学生は大学入学前に専攻選択を実施しているが、特定の学科の中でどのような分野を専攻すべきか、いかなる分野が自分の適性と能力に合致しているかといった問題に対して日本の学生も指導や助言を必要としていると指摘されている⁵。それゆえ、専攻選択に関する支援は専攻未決定の学生のみならず、学部や学科は決定していても、その中での細かな専門分野や研究テーマに悩む学生に対して有益だろう。

また、2012年8月の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」や2023年2月の中央教育審議会大学分科会「学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について」の中で、「アカデミック・アドバイジング」が取り上げられるなど、大学における学習支援の必要性がますます注目され、日本でもアカデミック・アドバイジングという言葉自体や支援方法が広まっている⁶。

専攻選択への支援を考える際、アメリカの歴史的、文化的、経済的、そして広く社会的な背景から生まれ、発展してきたアカデミック・アドバイジング制度をそのまま日本へ導入することは困難であり、日本の大学に適したアドバイジング制度を構築することが重要であると指摘されている⁷。日本で必要とされる支援を考えるためには、日本の状況や、これまでどのような支援が大学において行われていたかについて考察する必要があるにも関わらず、そうした観点での先行研究が蓄積されてこなかった。

そこで、本稿では、「レイトスペシャリゼーション」を導入する日本の大学の代表例である東京大学における専攻選択支援組織の活動を取り上げる。その中で、教養学部を設置された「進学相談室」の専任相談員を1969年以降勤めていた西村秀夫（1918年-2005年）

の活動に着目する。

本稿では、専攻選択への支援記録や支援に関する西村の考えが詳細に記載された『進学相談室年報』（第二-第六年報）⁸、さらに、西村の教育に関する考えが収録された『教育をたずねて：東大闘争のなかで』及び『西村秀夫記念文集：時代の課題に答えて』、大学における支援状況が公開された『教養学部報』及び『学生部だより』を分析する。当該資料を検討することで、西村が相談員を務めていた期間には、学生が自らの専攻やキャリアを主体的に考え決定するため、学生との対話によって人間形成を重視した支援が実施されていた実態が本稿にて初めて示されるところとなる。

2. 西村秀夫と「進学相談室」について

(1) 東京大学着任以前の西村秀夫の活動

西村秀夫は東京大学教養学部の学生部教官として、「一中（日比谷高の前身）一高、東大の秀才コースを通つてきた熱心なクリスチヤン」と学生に紹介されていた⁹。学生部教官を務める以前、1948年4月に山形県の基督教独立学園高校の教師となった¹⁰。ここでは、山村の塾のような高校で生徒と生活を共にしながら少人数の教育実践を行っていた¹¹。西村は教師の仕事から転身の道を求めており¹²、東京大学の教養学部長であった矢内原忠雄が西村の教育実践について見聞きし、教養学部における学生部教官の仕事提案した¹³。西村は高校教師の教育活動を通じて、青年の人間形成に寄与することが自身の教育活動だと考えていたため、「学生の世話をする」という言葉で表現された東京大学教養学部の学生部教官の仕事がこれまで行ってきた教育活動の延長として捉えていた¹⁴。

(2) 教養学部学生部教官の活動

西村秀夫は1951年3月には東京大学に着任し、4月からは教養学部の学生部専任教官として働き¹⁵、1967年に設置が提案された「進学相談室」の仕事を担当した後¹⁶、1969年11月から1975年まで「進学相談室」の専任相談員を務めた¹⁷。彼の教育に関する考えを読み解くために、まずは、学生部教官時代の活動について確認する。

1951年4月、東京大学教養学部に学生部が置かれた¹⁸。学生対応にあたり、学生課を学生部に、学生掛を学生課に、厚生掛を厚生課に格上げし、拡大改組が実施された¹⁹。学生部長、学生課長、厚生課長の3人の学生部専任教官は、通常の教授会メンバーの選考手続きを踏まずに任用され、教授会メンバーとならず、学生部教官室という独立の機関を構成した²⁰。西村は厚生課長として、学生との面談、貧しい学生のためのアルバイト先の開拓、寮生活の改善等を実施し、学生の人間としての成長に貢献したいと考えていた²¹。学生部教官は「事務教官」とも呼ばれ、西村はその立場を「教官とも事務官ともつかぬ曖昧な位置づけ」と認識していた²²。教官の身分が与えられたことについて、「その方が学生への説得効果があると考えられたからであるかも知れない」と西村は推察していた²³。西村自

身は、「自分の仕事は事務ではなく、教師として働くのだと思っていた」と述べており、前述したように学生の人間形成に寄与することを目指していたと考えられる²⁴。

学生部教官室の業務は、自治会活動や学友会活動、学生の個人的な問題の相談を受けることなど課外活動の全てを担っていた²⁵。学生部は、学生の相談所であり、学生に対するサービスセンターの性格を持ち、学生に対してあらゆる問題について遠慮なく相談に訪れてほしいと宣伝されていた²⁶。学生部の教官は、自身の組織を「よろず相談所」と考えており、「困った時には学生部へ」と学生に対し宣伝し、お茶を飲みながら学生と懇談し、問題を考えようという姿勢で相談活動をしていた²⁷。米国のS・P・S (Student Personnel Services) の影響を受けて、「課外において、人間教育を担当する」という表現もされた²⁸。さらに、1953年からは学生部教官等が東京大学への進学率が高い高校を訪ね、科類と進学コースの関係や、入学後の生活等について高校教師や高校生への紹介活動も実施していた²⁹。

だが、教授会のメンバーは学生部教官に「秩序維持」や「学生管理」の役割を期待し、学生部教官の「教育的活動」の意義は理解され難かったという³⁰。例えば、学生部教官は大学入学後のオリエンテーションを新入生に対する大学教育の重要な一部と考えていたのに対し、教授会メンバーは「事務手続き」の一部と捉えていたという断絶もあった³¹。

西村は学生部教官室を設置した学部長の意図を確認することは困難であると述べつつも、学生部長の回顧記述を引用し、学生運動対策の意図が含まれていたと考えていた³²。教授会は学生部教官に対し、「学生運動の防波堤的役割」を期待し、研究と授業のための平静な環境を確保する役割を求められたと西村は感じていた³³。1963年ごろから激しくなってきた大学当局と学生自治機関の対立の中で、学生との接触は絶たれ、学生部教官室における相談の機能は失われていった³⁴。

こうして、学生部教官の存在意義がほとんどなくなると考え、次々とメンバーが転出していった³⁵。学生部教官室の人員は減少の一途をたどり、西村が1969年11月に「進学相談室」の専任相談員となったことをもって学生部は消滅し、学生課だけとなった³⁶。

(3) 西村秀夫と「進学相談室」の関わり

1965年、西村秀夫はアメリカの大学の学生部の教育的援助活動の視察や学生との交流等を通じて、学生たちの心の底には深い無意味感、満たされない「意味への求め」があると感じ、帰国後には学生相談に集中した³⁷。ユタ大学 (The University of Utah) では、学生活動センターのアドバイザーが学生を監督する役割から切り離され、完全に学生側に立って学生の活動に協力できる立場を観察し、駒場の学生部教官室との違いを確認した³⁸。ニューヨーク市立大学 (The City University of New York) では、学生から専攻選択や履修の相談を受ける学習 (進学) 相談室を訪問し、マスプロ大学における教育不在を憂慮する教員が、実際に進学相談という身近なところから学習指導を進めている状況より

学びを得たという³⁹。以上のように、西村は米国における視察を通じて、学生対応への知見を得ていたと考えられる。

学生部で受けていた相談の中で特に多かったのは進学と留年をめぐる問題であり、それが後に「進学相談室」が設置されるきっかけとなった⁴⁰。1967年に進学相談室の設立が提案されたときには、前述したように学生部教官室は相談の場として機能しにくくなっていた⁴¹。だが、西村は、学生の進路の迷いには「価値や生きているという手応え」への模索があると考え、学生に向き合いたいと考えていた⁴²。学生部教官を辞することを決め、進学相談室の専任相談員として学生相談の仕事に専念することを希望したのである⁴³。

(4) 西村秀夫の「進学相談室」における方針

西村秀夫は、多くの学生にとって自主的な進路選択の動きが始まるのは大学入試の重圧から解放されてからだと考えていた⁴⁴。また、学生の専攻選択にあたり、高校生段階での選択は大学の専攻や将来のキャリアに関する情報不足や、「競争・選別」の教育体制により、主体不在の選択がなされているとの問題意識を西村は抱いていた⁴⁵。それゆえ、入学後に進路変更が起こる可能性は高く、大学入学時に専攻や将来のキャリアに関する十分な情報の提供が求められていると考えていたのである⁴⁶。

「進学相談」という言葉から、「進学相談室」は教養課程から専門課程への進学に関連した悩みを相談する場所だと解されていたが、生涯の進路や学習方法に関する学生の悩みも多かったため、広く「進路学習相談」と西村は考えていた⁴⁷。進路選択は進むべき学科等の選択であると同時に「価値観の選択」であると認識していた⁴⁸。

また、西村は「相談こそは真の教育である」と考えていたため、「進学相談室」は相談の場であり、インフォメーションセンターだと誤解し、進学の情報や資料等を求めて来訪した学生には教務課等の適当な場所を教えたという⁴⁹。履修、進学の制度や事務手続きに関する質問に対応するのは教務課の仕事だと考えていたのである⁵⁰。

進学相談室を訪れた学生の中には、進学者の平均成績や留年する人数からアドバイスをもらうことができると思っていたと不満を述べる者もいたが、西村は「そういう資料が、君の選択にどういう関係があるの？」と尋ねていた⁵¹。一人ひとりの学生を選択の主体として尊重し、点数によって振り分けられる姿勢を批判して対話をしていたのである⁵²。進学を希望する学科について、「それは何をするため？何のため？」と学生に対し問いかけることにより、学生が自身の中にある軸を明確にし、外的条件に振り回されることなく、目的に向かって自ら道を選び取ることを求めていた⁵³。

また、進学相談室が「懇談の場」になっており、相談に来た学生が一对一の対話を望む場合を除き、室内にいた学生を追い出すことはしなかった⁵⁴。その場に居合わせた教員や学生が良い助言者となったケースもあり、多くの人との関わり合いの中で進路に関する選択が行われるものだと西村は考えていた⁵⁵。

このように、西村は「相談」を重視し、人生に重要な影響を及ぼす進路選択のためには労を惜しむべきではなく、生きた人間に会い、生きた事実に出会うことが大切であると考え、「自分の足で行って、自分の目と耳とで確かめる」ことを学生に勧めてきた⁵⁶。

相談員の立場としては、相談員が人間である以上、「中立」や「無色透明」であることはあり得ず、意見の表明をしなければ無性格で中立を好む学生のみが訪れることになると考えていた⁵⁷。さらに、西村は相談の現場において「人間に深い関心を持ち、学生を人間として尊重し、うけ入れ、共感しつつ、しかも己自身の生き方を明白に語る（ハダカでぶつかる）ことの出来る人がほしい」と述べていた⁵⁸。重要なことは、対話を求めてきた学生を人間として扱い、十分に自己表現の機会を与え、相談員の見解を押し付けないようにすることであり、対話によって「選択する主体の形成」や「課題意識の明確化」に貢献することを目指していたのである⁵⁹。

西村が進学相談の場で達成しようとしてきたことは、以下の4点に要約できる⁶⁰。

- I. 問題の明確化：対話を通じて学生が自分の問題をより明確に捉えられるように協力する。「なぜ?」「何のために?」と問うことによって、学生がより本質的な問題を意識するように働きかける。
- II. 視野の拡大と思考の柔軟化：思考の枠を取り払い、硬直した考えを砕き、新しい事実に気付くようにする。
- III. インフォメーション獲得の援助：問題解決に必要な情報の所在を教え、また文字によらず、事実と人間から学ぶ機会が得られるようにし、必要な場合には教員や学生を紹介する。
- IV. 受容・共感・協力・激励：単に援助するだけでなく、関係を築き、学生が問題の解決に立ち向かい、課題を考え続けるように励ます。

次節で確認するが、「進学相談室」で扱っていた相談内容は、学生に専門分野の教員や事務の担当者を紹介するだけでなく、ゆっくりと話を聞き、考える必要のある問題が多かったため、学生が自身の問題を整理し、問題の本質を学生自身が捉えることができるように西村は協力し、励ましていた⁶¹。また、相談員は進路選択や学習のあり方に問題を持って訪ねてくる学生の協力者であり、解決するのは学生自身であると強調していた⁶²。

3. 進学相談室における相談内容・対応

(1) 進学相談室における相談件数について

西村は、進学相談室を訪れ相談した学生の来談件数（同一人物の場合も算入）を月別に記録していた（表1）。

進学に関する悩みや相談の波は4月から9月にかけて高くなるのが常態であるという所

表1：進学相談室における相談件数（月別）

（単位：件）

年度 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
1970	13	12	14	4	1	14	7	5	8	5	4	5	92
1971	18	11	14	4	3	23	6	3	0	4	1	0	87
1972	11	13	0	2	0	30	4	18	3	8	9	5	103
1973	36	13	8	5	4	19	16	13	13	10	19	4	160
1974	9	24	12	7	1	22	16	0	0	10	9	0	110

出典：各『進学相談室年報』より執筆者作成⁶³。10件以上を着色した。

感を西村は抱いていた⁶⁴。表1からは、重複も含めると年間100件程度の相談を進学相談室は受けていたことが確認できる。なお、記録に残らなかった訪問者も存在し、西村によると、インフォメーションセンターだと誤解して訪れた学生、親しみを感じて遊びに来た学生の訪問は数えていないという⁶⁵。1973年度の相談数の多さは、2回以上相談に来る学生の増加によるものであり、西村の相談の態度が変わったことによる影響だと自己分析している⁶⁶。西村は一人ひとりの学生との対話を綿密に実施し、対話後にも問題が解決していないと感じた場合には、後日手紙を送り、その後の様子を確認しようとしていた⁶⁷。

(2) 進学相談室における相談内容について

次に、学生の相談内容について『進学相談室年報』に載っている学生の声から確認する。1972年度の進路変更に関する相談内容のうち、西村の分類によると入学時の選択誤りと考えられるものが87名中9名であり、一方、入学後の生活の中で変化したと考えられるものが87名中53名であった⁶⁸。1973年度も同様の傾向を示し、入学時の選択誤りと考えられるものが99名中5名、入学後の生活の中で変化したと考えられるものが99名中47名であった⁶⁹。入学前の情報や知識不足によって選択を誤ったのではなく、学生生活を通じて自身の関心や将来を考えた結果として進路変更が起こったケースが目立っていた。西村は、学生の進路変更の問題は、納得できる生き方を模索する学生生活の中で当然のこととして起こっていると感じていた⁷⁰。学生の多くは、将来の進路を確定する段階には達しておらず、「人生の意味」を求め模索する中で進路変更が起こってくることは当然だと西村は考えていたのである⁷¹。

学生の進路変更について、少数派の①入学時の選択誤り、多数派である②入学後の変化、そして③事務的な問題・その他の3つに分けて相談内容の詳細を確認する。「入学時の選択誤り」や「入学後の変化」という区分は西村の分類によるが、学生の悩みがどこに当てはまるかについては区別がなく列挙されていたため、執筆者が各年度の『進学相談室年報』の記述から分類した。

①入学時の選択誤り

西村の記録では少数のケースである、入学時にそもそも選択を誤っていたと考えられるケースとしては、「他者の勧めによる選択」及び「成績による選択」が挙げられるだろう。前者の例としては、「親のすすめもあって文一にはいったが法律には興味がない。現在は心理学・文化人類学等に興味を感じている⁷²」「すすめられるままに、何となく理一にはいった⁷³」という声があった。他者の勧めにより進路を決めたことで、関心を抱けない状態に陥ってしまったケースである。後者の例としては、「医学部へゆきたかったが、理三は難しいので理二にはいった⁷⁴」「法学部へ行きたかったが文三にはいった⁷⁵」という声に代表されるように、希望があったにも関わらず、入試の難易度等の理由により、別の選択をしているケース例が挙げられる。

②入学後の変化

入学後の変化としては、「当初抱いていた関心の喪失から新たな関心の発見」及び「将来のキャリアを見据えた変更」が挙げられるだろう。前者は、大学生活を通じて入学時の関心に違和感を感じたり、関心を失ったりするケースである。「数学が得意だったから理一にはいった。しかし大学の数学には興味がない。理学部に行って研究者になる気もせず、図学が不可で工学部にゆく気もしない。経済学的なことをやってみみたい気がする⁷⁶」「生物に興味があったので理二にはいった。しかし生物学科の内容を知って幻滅を感じている。人間関係に興味を持つようになったので、法学部又は教養学科へ行きたい⁷⁷」などのように、入学時に進んだ科類から想定される専攻とは別方面への関心を見つけ出したケースである。他にも、『「人間的なものを求めるから」とか『もっとトータルに事象をとらえてゆきたいから』という理由で、理学部・工学部へのコースから、医学部医学科や文学部哲学科への転進を考えるものが増えてきている」と西村は指摘していた⁷⁸。大学入学後、授業等を通じて学問に触れたことや生き方を模索する中で、別の方向性を考えるようになったことが読み取れる。

他方、「将来のキャリアを見据えた変更」としては、医師や弁護士といった専門職に関心を抱く学生の声があった。例えば、「人に感謝されるので医者ならやりがいがあるのではないかと思う⁷⁹」「理一にはいったが、サラリーマンではなく、独立で仕事をしたいと思うので、医者になりたい⁸⁰」「文学に関心があって文三にはいったが、文三のクラスの雰囲気になじめず、文学部へゆくのがいやになった。法学部へ行って弁護士になりたい⁸¹」などである。入学後に専門職への希望を見出すケースが目立った。

③事務的な問題・その他

その他には、制度や手続きに関する質問が多く、こうした背景には「教務課の窓口が不親切で、納得のできるまで答えてもらえない」という学生感情があると西村は記してい

る⁸²。この点について、駒場の学生数の多さや学生から同じような質問が繰り返し寄せられる状況など、教務課職員が処理できる業務量を超えた対応が求められていたことから、教務課の窓口業務が十分に機能していないという懸念を西村は示していた⁸³。また、学生の中には、留年の仕方、進学振分けの際の注意点、問題点や盲点などの情報、点数の取り方について知るために進学相談室を訪れた者もいた⁸⁴。西村は、「進学相談室」が相談の場であると考え対応していたため、進学に関する資料や点数の上げ方を教えないことに対し、不満を漏らす学生や期待外れだと述べる学生もいたという⁸⁵。

(3) 進学相談室における学生への対応について

ここまで見てきたように、入学後の専門分野の選択に関し多様な悩みを抱き、学生は相談室を訪れていた。こうした学生の悩みに対し、学生相談室が果たした結果を確認するため、利用した学生の声を分析したい。学生の声の収集方法として、西村は、進学相談室を利用した学生のうち、住所を把握している学生に対し手紙を送付していた。1971年度は69名への依頼中16通、1972年度は13通（依頼数記載なし）、1973年度は89名中23名より返信があった⁸⁶。西村が年報に残した学生の声からは、相談室の果たした役割及び結果について①自己の課題や方向性の発見、②紹介による解決、③進学相談室や進学に関する制度への不満の3つに分類できた。なお、学生の声については原文のまま引用する。

①自己の課題や方向性の発見

学生の中には、進学相談室における対話を通じて、自身の中での漠然とした不安や課題が明確になり、進むべき方向性が見えてきたという者がいた。以下に学生の声を引用する。

先生に話を聞いていただくうちに自分が何をしたいのか、といったことが明確になっていったように思います。やはり進学というのは自分自身で考える問題ですから、その点を明らかにできたということは満足すべき結果だと思います⁸⁷。

よく言われることですか、相談室を利用しても、問題に解決を与えるのは自分であり、本人の心の持ち方次第だと思います。ただ相談室は精神的なバックアップを送ることに重要な役割があるのでしょうか。もちろん、実際の解決方法を示す（例えば私の場合は紹介状）ことも重要ですが、それ以上に自分自身で解決を与えようという心構えができるようにし向けることの方がより重要でしょう。ただ一生懸命に学生の話に耳を傾けるだけでも、学生は安心するものです⁸⁸。

このように先生に問題を整理していただき、さらに助けていただきながら、一つの例を組み立ててみることによって、今度は自分一人でじっくり考えることができるように

なるのですから、相談室を置いておくことの意義は大きいと思います⁸⁹。

こうした学生の声からは、西村との対話を通じて、自身で進むべき方向を見つけていくことができたことが窺える。学生の声にもあるが、話を真摯に聞いてくれる存在が大学にいることの重要性を指摘できる。また、訪ねた直後には求めていた答えが得られなかったと感じたものの、「今君が悩んでいることは決して無意味ではない。むしろ君の一生において最も大切なものかも知れない」という西村の言葉から、「生きることの意味」を自ら考え、答えを探し続けようと決意した学生も存在していた⁹⁰。以上のように、学生が主体となり、自身の進学等に関する課題を主体的に考えられるように進学相談室で支援がなされていた。

②紹介による解決

(3)の①のほか、西村が適切な教員や上級生を学生に紹介したり、話を聞くように勧めたりしたことで解決に至った事例が挙げられる。例えば、以下のような学生の声があった。

相談室へうかがってみて、自分が将来のビジョンをほとんど持っていないことをはじめて自覚できました。……最初の相談をキッカケにして物理のW先生や地物のA先生のところへもおしかけて行って話を聞いたりしました。僕のような学生の場合、相談室は自分で考え、行動を起こすきっかけをつくり出すという働きがあるようです⁹¹。

御相談に行った当時も、この学科に決めておりましたが、内部事情に暗く、果してそちらへ進むことで、自分の希望する道へつながるかどうか不安でした。しかし、先輩に御紹介いただき、いろいろとうかがって、何となく学科のようすがわかり、とても参考になりました。先輩と話す機会がもてるということは、学部学科を知ることにおいて最も有益な方法の一つだと思います⁹²。

上記のように、自身の課題を知り教員のところへ相談に行くことができた学生や、進学相談室の紹介により接点のない上級生と繋がることができ専攻分野への理解を深められた学生がいた。進学相談室が学内のハブとなり、学生の相談に対して適切な人材を紹介することで解決を図っていた実態が浮かび上がってくる。

③進学相談室や進学に関する制度への不満

(3)の①及び②は進学相談室で問題を解決できた事例であり、学生からの肯定的な意見である。だが、学生からの返信には進学相談室に対する不満や、「最低点を公表してほしい」という要望、進学振分け制度そのものへの否定的な意見も書き連ねてあった。具体的な内

容としては、以下のような声である。

進学相談室というからには、さまざまな資料が保管してあって、たとえばどこから何人くらいの人がどこへ進学したとか、進学者の平均成績とか、再志になって留年したり、教養科目が不合格となって留年する者の人数とか、そのようなものを参考にしながらアドバイスがなされると思っていた⁹³。

進学相談室は振り分けの要点などについて全く形式的な事しか知らないように思う。現在の振り分けには70点附近の人々にとり、ギャンブル的要素が非常に大きい。例えば第2志望というのは殆んど意味がなく、大穴あるいは極低人気のところを書くしかないとか、ゼミナール5コぐらいで約2点平均を上げるとか……これらは簡単な計算から出る数学的事実である……など、学生の必要とする点について進学相談室では全く教えてくれない。これらのことは進学相談室の相談の対象外とするなら、相談室の存在意義は一体何であろうか⁹⁴。

こうした不満の声からは周囲の学生と点数を競い合って進学先を決める必要があるため、学生は点数を上げるための情報や進学者の平均成績といった詳細な情報を求めていることが読み取れる。西村は点数に左右されるのではなく、学生自身の考えで、自分自身の選択の基準を確かめてほしいと考えていた⁹⁵。だが、西村も点数の問題には理解を示し、十分な進路相談を前提として志望者全員が希望の専攻に進むことを理想として掲げていた⁹⁶。すべての学生が相談できる機会を持った上で、研究室訪問や教員及び学生との交流を通じて専攻への理解を深め、自身の専攻やキャリアの希望を明らかにできることを望んでいたのである。

また、『進学相談室年報』には西村の相談態度に対する不満等の声は掲載されていなかったが、西村は自身の態度について内省していた。例えば、「これまでの私は相手をことばをとおして論理的に判ろうとし、性急に批判しあるいは助言していた。私には相手の気持を感じとり、批判を加えずにそのままにうけ入れるという態度は欠けていた⁹⁷」と反省した記録や、自身の「世話好き」な性格が故、学生が求めないことまで親切心から助言したことを内省した記録が存在する⁹⁸。このように、西村は自身の助言や支援が常には適切ではないことを理解し、対応を省みながら学生に一層寄り添おうとしていたと考えられる。

その他、教務課の窓口では相談しにくいという問題に対して、制度や手続きに関する質問には「教務課に行って聞きなさい」というスタンスで西村は対応していたものの、1973年頃から「この学生も縁があって私のところに来たのだから、できるだけよい対応をしよう」と考え、一緒に資料を見て調べ、それでも疑問が残れば教務課に行くことを勧めるなど、より親身に学生に接するように対応を変化させていた⁹⁹。

4. 進学相談室が果たした役割・支援実態

ここまで確認した西村の学生への対峙姿勢からは、学生一人ひとりとの対話を通じ、興味関心や将来に向けて何をしたいかについて気付かせ、必要に応じて適切な教員等を紹介するなど、多様な支援を実施していた実態が明らかになった。点数に関する情報提供ではなく、学生自身が主体となり、自分の問題をより明確に捉え、選択ができるように対話を重視していた。さらに、実際に人と会うことが専攻選択において重要だと考えていたことから、教員や上級生を学生に紹介する役割も果たしていた。下図1に示したように、「進学相談室」が学内のハブとなり、相談に訪れた学生と学内の教職員や他の学生とをつなぐ役割を果たしていたと考えられる。

また、専攻選択に関する支援体制としては、各専門分野に関する質問には教員や学生が対応し、履修や進学の制度、事務手続きへの質問対応は事務組織が行い、進学相談室では対話によって学生自身での問題解決を促すなど、分業体制が明確になっていた特徴も挙げられる。

なお、前述したように学生にとって教務課が質問しにくい場所であったため、1973年頃から進学制度や手続きに関する質問に対し、西村は学生と一緒に資料を見て調べ、それでも疑問が残れば教務課に行くことを勧める方針へと転換した。だが、教務課の現状を放置してはいけない、「進学相談室」に教務課の業務の補完的役割を果たさせてはいけないと考え、学生から多く寄せられる質問には文書で回答することや進学に関する資料を分かり易くするなど教務課の役割が十分に機能するような対策案を西村は考えていた¹⁰⁰。

以上のように、東京大学において、学生部教官を経験し、学生と長年向き合ってきた西村秀夫が専任相談員であった期間の「進学相談室」では、各学生との対話によって、学生の生き方を探り、人間形成を重視した支援を実施していたことを明らかにすることができた。

その他にも多くの教員や学生が専攻選択に関し、支援的な役割を果たしていたと推察できる。実際、西村は「その場に居あわせた教員や他の学生が、よい助言者になった¹⁰¹」、「各学科に『進学相談担当教官』おくことを要望したところ、74年度から実施されることになっ

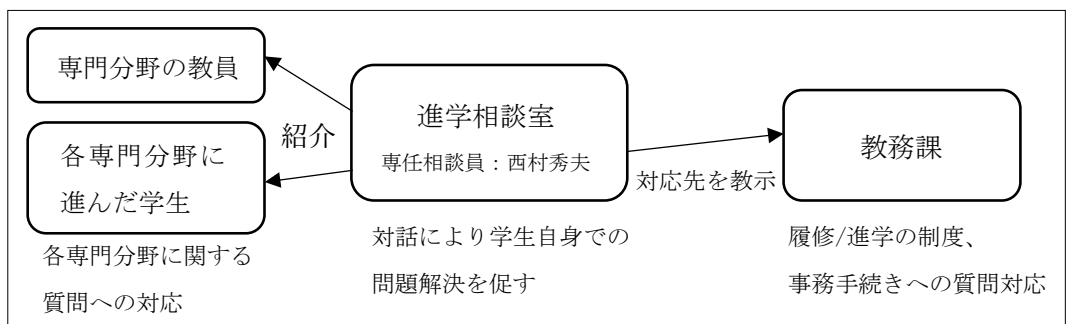


図1：進学相談室における西村秀夫の対応

出典：各『進学相談室年報』を参照し、執筆者作成。

た¹⁰²」と述べ、専攻選択における教員や学生の存在の重要性を記している。このような「進学相談室」を介さない存在が果たした役割に関する考察については、今後の研究課題としたい。

その後、「進学相談室」は、1989年に「進学情報センター」となった。「進学情報センター」の発足時には資料室に端末が導入され、コンピュータで進学志望状況等が検索可能になるなど、学生が自主的に情報を集めることのできる場所としての性格が強まったという¹⁰³。今後の研究課題として、西村秀夫以降の「進学相談室」の相談員による支援実態や「進学情報センター」における支援実態を明らかにし、東京大学、そして日本の大学における専攻選択への効果的な支援体制及び方法について考察したい。

【付記】本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の支援を受けたものです。

註

- 1 清水栄子『アカデミック・アドバイザー その専門性と実践—日本の大学へのアメリカの示唆』東信堂、2015年。
- 2 福留東土「学士課程における専攻選択プロセスの日米比較」『大学経営政策研究』第8号、2018年、22-23頁。
- 3 同上、22頁。
- 4 福留は、「専攻選択」を学部を選択、及び学部内の学科や専攻の選択の双方を含む、学士課程で深く学ぶ専門分野を選び取る行為全体と定義している（福留「学士課程における専攻選択プロセスの日米比較」22頁より）。
- 5 沖原豊「学生の修学指導」『厚生補導』通巻119号5月号、1976年、29頁。
- 6 2012年の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）」（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_jcsFiles/afeldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf（2023年12月20日最終アクセス））の中で「アカデミック・アドバイザー制度」が取り上げられ、2023年の中央教育審議会大学分科会「学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について（審議まとめ）」（https://www.mext.go.jp/content/230313-mxt_koutou01-000027826_3r.pdf（2023年12月20日最終アクセス））の中でも「アカデミック・アドバイザー」が紹介された。
- 7 清水『アカデミック・アドバイザー その専門性と実践—日本の大学へのアメリカの示唆』170-179頁、及び中野正俊・井上咲希「アカデミック・アドバイザーの実践的検証—金沢大学におけるアドバイザー需要について—」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』29、2022年、40頁。
- 8 『進学相談室第一年報』は東京大学文書館に所蔵されておらず、入手できなかった。
- 9 早野雅三「〈特集〉オリエンテーション—卅一年度入学者のために— 学生部というところ」『教養学部報』第47号、1956年3月24日、1頁。
- 10 西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に答えて』西村秀夫先生記念文集刊行会、2007年、486頁。
- 11 西村秀夫『進学相談室第六年報』1975年、7頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0085）。「基督教

- 独立学園時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』317-324頁にも基督教独立学園時代の教育について記されている。
- 12 西村秀夫「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」『東京大学教養学部 学生部だより』第9号、1969年、7頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0082）。
 - 13 西村『進学相談室第六年報』7頁。
 - 14 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」7頁。
 - 15 西村は1951年4月に東京大学教養学部学生部教官となったが、「五一年三月、着任した私の最初の仕事は新入学生の個人面接だった」と書かれており、3月には既に着任していたと推察できる（「東京大学学生部時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』325頁より）。
 - 16 西村『進学相談室第六年報』10頁、及び「東京大学学生部時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』329頁。専任となる前の相談活動については、毎週月曜日（受付時間午後2時より4時まで）が進学相談室における西村の相談時間とされていた（「進学相談室について」『教養学部報』第155号、1968年2月14日、1頁より）。
 - 17 永井久美子・青木優「進学情報センター」駒場70年史編集委員会編『駒場の70年：1949-2020：法人化以降の大学像を求めて』東京大学出版会、2021年、183頁によると、1969年4月に進学相談室専任となったと書かれているが、西村秀夫『教育をたずねて：東大闘争のなかで』や西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』には1969年11月に進学相談室の専任となったと書かれているため、後者を採用した。
 - 18 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」2頁。
 - 19 栃原寅雄「学生課の歴史をふり返る—発足から東大紛争まで—」駒場50年史編集委員会編『駒場の50年1949-2000』東京大学出版会、2001年、318頁。
 - 20 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」1-2頁。
 - 21 「東京大学学生部時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』325-326頁。
 - 22 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」8頁。
 - 23 同上、26頁。
 - 24 「東京大学学生部時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』325頁。
 - 25 栃原「学生課の歴史をふり返る—発足から東大紛争まで—」319頁。
 - 26 「学生手帖 学生部の新機構」『教養学部報』第2号、1951年5月10日、3頁。
 - 27 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」11頁。
 - 28 同上、26頁。
 - 29 同上、11頁。
 - 30 同上、8頁。
 - 31 同上、21頁。
 - 32 同上、2頁。
 - 33 西村秀夫『教育をたずねて：東大闘争のなかで』筑摩書房、1970年、228頁。
 - 34 西村秀夫『進学相談室第四年報』1973年、6頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0085）。
 - 35 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」22頁、及び西村『進学相談室第六年報』3頁。
 - 36 西村「東京大学教養学部学生部教官の活動—18年の回顧と反省」29頁、及び西村『進学相談室第六

- 年報』3頁。
- 37 「東京大学学生部時代」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に込めて』329頁。
- 38 西村秀夫「アメリカの大学に見る 学生相談室」『教養学部報』第138号、1966年4月12日、7頁。
- 39 同上。
- 40 永井・青木「進学情報センター」183頁。
- 41 西村『進学相談室第六年報』10頁。
- 42 同上。
- 43 西村『教育をたずねて：東大闘争のなかで』229頁。
- 44 西村秀夫『進学相談室第三年報』1972年、2頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0085）。
- 45 西村秀夫『進学相談室第二年報』1971年、4頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0085）。
- 46 西村『進学相談室第三年報』10頁。
- 47 西村『教育をたずねて：東大闘争のなかで』231頁。
- 48 西村『進学相談室第四年報』7頁。
- 49 西村『進学相談室第四年報』3頁、及び『進学相談室第六年報』2-3、及び13頁。
- 50 西村『進学相談室第四年報』7頁。
- 51 西村秀夫『進学相談室第五年報』1974年、3頁（東京大学文書館：F0228/S05/SS02/0085）。
- 52 西村『進学相談室第三年報』8頁。
- 53 西村『進学相談室第六年報』3頁。
- 54 同上、7頁。
- 55 西村『進学相談室第二年報』2頁。
- 56 西村『進学相談室第三年報』2頁。
- 57 西村『進学相談室第二年報』3頁。
- 58 西村『進学相談室第六年報』12頁。
- 59 西村『進学相談室第二年報』3頁、及び西村『進学相談室第三年報』2頁。
- 60 西村は、資料「私にとっての学生相談—74年1月、学生相談シンポジウムでの報告」の中で進学相談への対峙姿勢を要約している（西村『進学相談室第五年報』13-14頁より）。
- 61 西村『教育をたずねて：東大闘争のなかで』231-232頁。
- 62 西村『進学相談室第二年報』1頁。
- 63 表1の件数について、1972年6月の0件は、西村の個人的な長期欠勤による（西村『進学相談室第四年報』1頁より）。また、1972年10月以降、前年度に比べ件数が多い理由として、新しい相談室の場所が以前より分かりやすいためだと西村は考えていた（西村『進学相談室第四年報』1頁より）。1974年11月に西村は心身の疲労のため入院し、翌年1月に進学相談室の勤務に戻った（西村『進学相談室第六年報』6及び14頁より）。
- 64 西村『進学相談室第三年報』1頁。
- 65 西村『進学相談室第六年報』13-4頁。
- 66 西村『進学相談室第五年報』1-2頁。
- 67 同上、2頁。
- 68 西村『進学相談室第四年報』2頁。
- 69 西村『進学相談室第五年報』2頁。
- 70 西村『進学相談室第四年報』6頁。

- 71 同上。
- 72 西村『進学相談室第四年報』2頁。
- 73 西村『進学相談室第二年報』4頁。
- 74 同上。
- 75 同上。
- 76 西村『進学相談室第四年報』2頁。
- 77 同上。
- 78 西村秀夫「選ばれるものから選ぶものへ」教育と医学の会編『教育と医学』21(4)、慶應義塾大学出版会、1973年、37頁。
- 79 西村『進学相談室第二年報』5頁。
- 80 西村『進学相談室第四年報』2頁。
- 81 同上。
- 82 西村『進学相談室第五年報』3頁。
- 83 西村『進学相談室第五年報』8頁、及び西村『進学相談室第六年報』13頁。
- 84 西村『進学相談室第五年報』3頁。
- 85 同上。
- 86 西村『進学相談室第三年報』2-3頁、西村『進学相談室第四年報』3頁、及び西村『進学相談室第五年報』2頁。なお、『進学相談室第三年報』及び『進学相談室第四年報』では返信数をそれぞれ「16通」、「13通」と表しているが、『進学相談室第五年報』では返信数ではなく返信者数「23名」と記録されているため、そのまま引用した。
- 87 西村『進学相談室第三年報』3頁。
- 88 同上。
- 89 西村『進学相談室第四年報』3頁。
- 90 西村『進学相談室第五年報』4頁。
- 91 西村『進学相談室第四年報』3頁。
- 92 同上。
- 93 西村『進学相談室第五年報』3頁。
- 94 同上。
- 95 西村『進学相談室第五年報』8-9頁。
- 96 同上、10頁。
- 97 西村『進学相談室第六年報』5頁。
- 98 西村はエンカウンター・グループの合宿に参加し、自身の行動を内省していた（「東京大学退職」西村秀夫先生記念文集刊行会編『西村秀夫記念文集：時代の課題に応じて』353-354頁より）。
- 99 西村『進学相談室第五年報』5-6頁。
- 100 西村『進学相談室第六年報』13頁。
- 101 西村『進学相談室第二年報』2頁。
- 102 西村『進学相談室第五年報』8頁。
- 103 永井久美子「『駒場の70年』と進学情報センター」『進学情報センターニュース』第91号、2022年4月、https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/agc/news/91/91_genkou.pdf（2023年9月24日最終アクセス）。

（よしおか かな 東京大学大学院教育学研究科）